HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語敬語および関連現象の社会語用論的研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	滝浦, 真人
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	乙第7006号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65749
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Masato_Takiura_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　滝　浦　　真　人

学位論文題名
日本語敬語および関連現象の社会語用論的研究

本論文は，申請者によるこれまでの４冊の著作を再構成してまとめなおし，全体趣旨や構成記述，要旨・結語を書き加え，論文博士学位申請論文として提出された。現時点における申請者の社会語用論的研究の集大成とも言える，長大な一編である。４つの著作が第１部から第４部までをなし，それぞれが，11 章，6 章，4 章，5 章に分かれて全体が 26 章相当の構成になっている。

まず，第１部では，日本において「敬語」という概念がどのように形成されてきたかを歴史的に跡づける論考である。特に，Ｉ の第 1〜5 章では，ロドリゲス・チェンバレン・三橋要也・山田孝雄・時枝誠記・三上章・金田一京助などを順に論じながら，敬語論を研究史や思想史の観点から丁寧に跡づけている。従来の敬語文法が，「敬意」を軸に人称と関連づけられて確立していくプロセスに山田を中心とする文法学者が深く関与していたこと，時枝による関係認識の敬語論も言語過程説との不整合によって影響力を持ちえなかったこと，金田一らによって戦後の国語施策のなかで「配慮」「待遇行動」といった広い概念で捉えられるようになったものの，現在でも敬意や人間関係といった概念の混用や混乱は解消されていないことなどを，時系列にそって思想史的観点から事実を整理した上で，種々のレベルの分析を加えている。

第１部 II 第 1〜4 章では，ポライトネス理論が社会学の成果から発想されていることを踏まえ，デュルケームやゴフマン，また，儀礼性・聖性との関連を論じるところから分析し始める。さらに，グライスの語用論との関連で検討を加えながら，ポライトネス理論について細かに説明した後，事実から遠隔化するスライドを基盤にするネガティブ・ポライトネス，聞き手への同化を基盤にするポジティブ・ポライトネスとして，ポライトネス理論を再定義している。

第１部 III の第 1・2 章では，広く言語学的視点からの敬語研究を洗い直している。特に，人称説を原田の honorifics に関する統語論的研究などを取り上げながら再検証し，久野暲の談話文法研究の成果や移動の視点などを距離の語用論に包摂しようとする考察を展開させている。

第２部第 1 章では，社会学や文化人類学，あるいは会話分析などを踏まえて，T/V 代名詞や語用論におけるフェイスについて発展的な解説を加えている。第 2 章では，ポライトネス理論として広く知られているブラウンとレヴィンソンの理論を，語用論の理論や文化論的要因などの観点から多角的に説明している。第 3 章と 4 章では，敬語を「人間関係の距離」を表すものとして論じ，不整合と混乱を内包する従来の敬語論を再編成して，呼称や指示詞とポライトネスの関連に言及する。特に，敬語の意味論としての説明には限界があることを指摘し，敬語の語用論として分析を積み上げることで，会話における人間関係像を切り分けて表示するシステムと記述していく新たな枠組みと方法論を提示している。第 5 章では，ポライトネス理論を会話スタイルや文化現象として，対照語用論のデータも含めて，これまでと異なる角度から論じている。会話における「断り」や「ほめ」といった発話を，言語ごとの異なるコミュニケーションスタイルの記述として対照言語学的知見を踏まえて分析し，言語ごとのスタイルの差異を明示的に述べてもいる。第 6 章は，これまであまりポライトネスや敬語と関連づけられることのなかった終助詞の制約や待遇性を論じた，新機軸の論考である。「よ」「ね」の研究はこれまでも夥しい数の論考が公刊されているが，待遇性の違いへの言及はあるものの，発話機能やなわ張りという観点で論じられることが多く，待遇性という切り口で整理しなおして議論する希有な論考と言える。

第３部では，第１部 Ｉ で思想史や文法学説史の中に位置づけて取り上げた山田孝雄についてさ

らに深く掘り下げ，関連する理論や時代背景を踏まえて詳細に論じている。第 1 章では，山田の国学的思想の確立と従来の文法論・品詞論の評価を重ねて論じ，第 2 章では，山田文法の中核でもある陳述論，述体と喚体，語論と句論などを丁寧に解き明かしている。第 3 章では，山田文法において，尊敬語と謙譲語が中心に据えられ，人称という文法現象として原理化されていったことを明晰に述べている。第 4 章では，敬意と関連づけて論じられている間接性が山田文法では結果的に看過されていることを，自敬敬語や親愛の敬語などにも言及しながら考察を加え，説得力ある論証として示している。

第４部では，広く日本語そのものを論じる中で「親しさ」や「あいさつ」，対人関係，また通時的・対照的観点からコミュニケーションを論じ，親しさやポライトネスをめぐる文化的考察や，現在の敬語をめぐる状況を鳥瞰しつつ論じている。第 1 章では，標準語という人工的で抽象的な言語の成り立ちと特異性を論じ，現在の日本語（＝国語）がいかに形成されてきたのか，言文一致が言語史においていかに位置づけられるかを，具体的事例として宮沢賢治作品における「岩手語」の扱いなどにも言及しつつ，広く論じている。第 2 章では，日本語のコミュニケーションにおけるあいさつが表現の型を作り出し，あいさつの儀礼化や形式的固定化に関与していること，T/V 代名詞のありようを観察しながら，英語が世界語として，遠隔化へとシフトしていく傾向が観察されることなどを示している。第 3 章では，近代前期の法学者穂積陳重の呼称論から，距離で敬語を説明するのと同じ論理としての「対人関係の２方向性」という考え方で呼称のしくみも説明できることを論じている。社会学者のルーマンのシステム論や，社会心理学者の山岸俊男の「信頼」という考え方を導入して，ポライトネス型の「信頼のコミュニケーション」と敬語型の「安心のコミュニケーション」を対比させる，興味深い議論を展開させている。第 4 章では，通時的に，また，言語共同体の対照という点で，親しさがコミュニケーションにおいてどのような位置づけの変異を見せるかを探っている。時空間における変異は，まず近世の江戸のコミュニケーションのありようを『浮世風呂』からのデータで論じ，中国語でのコミュニケーションのありようを記述・分析し，次いで，韓国語におけるコミュニケーションの実態を記述・分析している。大まかに言えば，中国語は，親しくない関係では形式的な表現の選択が優勢となり，親しい間柄ではむしろ形式的に固定された表現を回避する傾向が強く，韓国語は，「気遣いの踏み込み」に対する許容度が日本語より高く，ポライトネス・コードは日本語より低い，と結論づけている。第5章では，20 世紀半ばに国語審議会が「これからの敬語」についてまとめてから半世紀を経た今世紀初めまでの国語審議会の変化，それと関わる社会情勢の変化を念頭に現代日本語のコミュニケーションを多角的に論じている。世間では日本語の過剰な丁寧さが指摘される一方で，伝統的な配慮表現が十数年程度で衰退していることを確認し，安心・信頼と SNS メデイアの関係といった観点からも日本語のコミュニケーションの変化を論じている。

巻末の結語で全体を振り返って簡単にまとめ，関連する問題や刊行後の学界の反応・受容に言及しつつ論は閉じられる。